



TITLE:

京大広報 No. 213

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 213. 京大広報 1981, 213: 99-106

ISSUE DATE:

1981-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209473>

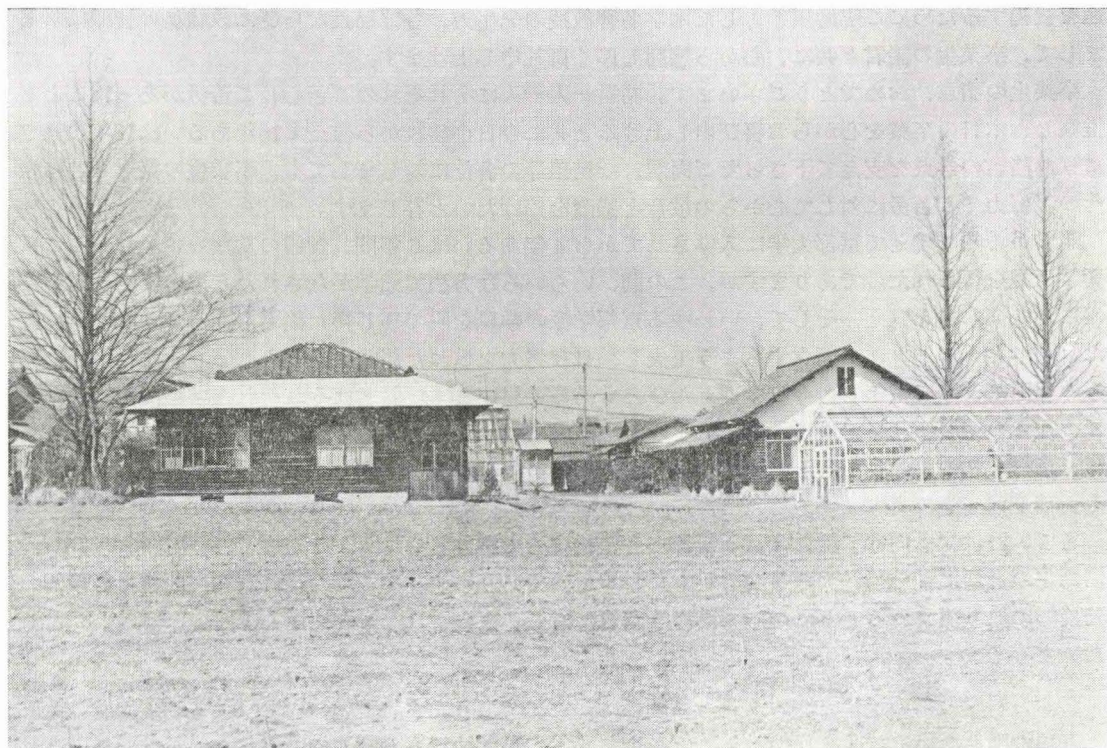
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 213

京都大学広報委員会



農学部・植物生殖質研究施設本館及び実験圃場 ー関連記事本文 103 ページー

## 目 次

### 卒業式における総長のことば

総長 沢田 敏 男…… 100

昭和56年度入学者選抜学力試験の結果…… 102

昭和55年度修士学位授与式…… 102

昭和55年度卒業式…… 103

医療技術短期大学部の卒業・修了式…… 103

部局長の交替…… 103

### <紹介>

農学部・植物生殖質研究施設…… 103

原子炉実験所第15回学術講演会…… 104

### <随想>

偶感 名誉教授 伊 藤 一 郎…… 105

### <保健コーナー>

美しい歯並びのために…… 106

## 卒業式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男



本日ここに、昭和55年度卒業式を挙行し、2,428名の新しい学士を社会に送り出すことができますのは、京都大学のみならず、国家社会にとっても大きい喜びであります。諸君の卒業を祝い、その前途を祝福するためにご臨席頂きました本学名誉教授の先生方、各部局長ならびに教職員の皆様に対しまして、卒業生の諸君と共に、心から感謝し厚く御礼申し上げます。

卒業生の諸君、おめでとうございます。諸君一人一人にそれぞれのご苦心、ご苦勞があったことと推察し、本日の卒業を心からお喜び申し上げると共に今日小学校から数えて16年あるいは18年の長きに亘り諸君の学業を支えて下さったご両親、ご兄弟等の各位に対しましても、卒業生の諸君と共に、そのご努力やご苦勞に対して心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。

諸君が希望に燃えて京都大学に入学されてから4年あるいは6年間、蛍雪の功になって、今日ここに新学士号を得られたのでありますが、この間、いろいろな方法で勉学がなされたと思います。自ら学ぶことの楽しさを覚え、そして、いわゆる京都学派の学風を肌で感じ得た諸君もあるでしょう。また、勉学とスポーツとが両立するよう工夫し、日夜努力を重ねた諸君もありましょう。また、いろいろの理由によって留年し、今日を迎えたひともあると思います。諸君はそれぞれ在学期間中を顧みて、種々の感慨に浸っていることなのでしょうが、諸君はいずれもめでたく新学士になられたのであって、京都大学の卒業生であるという自信と誇りを持って、実社会に向っての力強い第一歩を踏み出し、前進すべきであります。

さて、21世紀に向けて世界は益々複雑に多様化するであります。その中で、科学技術の進歩と、国際化の進展について、大きな関心がもたれるものであります。そこで今後これらの問題と直接的、間接的に取り組まれることになるであろう諸君に対し、次のようなことを申し上げて、餞けたいと思います。

まず、科学技術の進歩と心の文化との関係についてであります。

人類の限りない存続・発展のためには、少なくとも科学技術と人間の心の文化とがバランスのとれた姿で進歩・発展することがいちばん大切なことであると考えます。このことは、既に科学技術の進歩と人権に関する国連決議（1970年12月）においても指摘されており、科学技術の進歩と、その他の学問すなわち文化的、精神的、道徳的なものの進歩とのバランスが保たれることが重要であるとされております。

今日、日本の社会の現状を直視しますと、心の文化の貧弱さや、更にその衰退すらもしばしば見聞されることは遺憾であります。科学技術の進歩が大きく貢献したことによって、物質的には豊かになり、食糧による栄養は、十分摂取されるようになっていますが、一方、心の文化を涵養する栄養分の摂取は極めて不足しており、“心の栄養失調”をおこしている人があるように思います。そしてこのことは青少年層に多いようであります。

古い諺に「衣食足りて礼節を知る」というのがありますが、現代社会では、“衣食足りて心寒し”というべきでしょうか。このような社会であってはなりません。“心の栄養失調”とは、つまり人間として、道徳、信仰、芸術等の面、いい換えれば、善とか美とかいう面の勉強・修学が不足していることからおこる状態であるといえましょう。そして公德心の欠如、抑制心の喪失、精神の脆弱化等は



この栄養失調のあらわれであります。

それでは、“心の栄養失調”をおこした最大の原因は何でありましょうか。それは1930年頃より始まったいわゆる知識の爆発時代を迎えて、科学技術と心の文化とにアンバランスが生じたことに起因するものであらうと考えます。すなわち知識の急激な発展に目をうばわれ、また日々進歩する科学技術を習得するのに大童であって、心の文化についての修学や教育をおろそかにしてきたことにあると思います。

科学技術の進歩は今後も限りなく続くことでありましょう。またこの進歩は続けねばなりません。そして、この科学技術を背負って立つ諸君であります。しかし諸君、決して、“心の栄養失調”になってはなりません。このために、卒業後においても、できる限り東西の古典や芸術等に親しみ、またスポーツを愛好して心の栄養補給に努めて下さい。そして心の豊かさを保持されるよう希望するものであります。

つぎに申したいのは、国際化についてであります。今日盛んにいわれますこの国際化について、もう少し掘りさげて考え、国際人としての資格や、国際交流のあり方等について正しい認識をもつことが大切であると思います。

国際化とは、ひと言でいうと、日本と、他のさまざまな国、あるいは、さまざまな文化圏との接触のダイナミズムのことであるといえます。従って国際化というものは、こちらの都合と相手方の都合とのかね合いからして、国際政治の状況下で、相対的な選択しかできない性格の事柄であります。その点で日本人はもう少し謙虚になり、一方的な考え方になり勝ちなことを反省すべきではないでしょうか。そして、われわれは、もっと切実に国際化の問題を考えることが必要であり、この点、大学も日本の国際化を正しく促進させることに努めねばなりません。現代は、国々が多様な交流関係を深める国際的相互依存の時代であり、他の国との調和が肝心であります。国際的相互依存が全く欠けた状態は敵対関係であります。逆にこの国際的相互依存を深めることによって、世界は平和と安定した秩序とをより確実に達成できるようになると思います。戦前の日本のように、自国の国益のみで世界の秩序を乱すことであってはならず、積極的な国際化によって、世界各国との調和に努め、同時に平和な世界秩序の確立に貢献することでなければなりません。なかんずく、アジアに位置する日本としては、アジアに向けて開かれた国際化に心掛け、それによってこの地域に望ましい国際的相互依存の実現すべき責務をもつものと考えます。このことは、京都大学としても、学術交流の面から積極的に取り組まねばならない問題であります。

学術交流においては、お互いに相手国の学術文化の *identity* を認め合うという、つまり彼我の文化に対等の主権を与えるような、いわゆる文化相対主義の境地で、交流し合うものでなくてはなりません。そして、そのような文化的な出会いと、協同的研究活動こそが、これまでの異なる歴史・習慣あるいは自然的社会的環境を乗り越えて、また、いろいろ困難な条件を克服して、人類の幸福と平等に向けて貢献するものであると考えます。その現実的方策としては、わが国の研究者が諸外国に出かけて、文化的に活躍すると同時に、日本の大学が、もっと外国の研究者や学生に対し開かれた大学となることが肝要であります。大学が開かれた精神と機能をもち備え、さまざまな異質な要素を受け入れる自由さをもったとき、学術上の進展はもちろん、一段高い境地での知性と精神的自由に目覚めることが可能になるであらうと信じます。

さらに肝心なことは、われわれ一人一人国際化に向けて、開かれた心、開かれた感覚をもたねばなりません。そして人間としての躰を厳しくすることです。つまり外国の人びとと共感し、文化的了解という意味での尊敬とで結ばれるような、そしてたとえ国家や他人の援助がなくとも、独り歩きできるような、たくましい人間になることであると考えられるものであります。

新学士となられた卒業生諸君、そしてまた、21世紀を担って立たれる諸君。心の栄養分を十分摂取

し、バランスのとれた人間として、また国際化に向けて開かれた心をもつ人間となって、今後思う存分に活躍されんことを祈って止みません。

どうか諸君、健康にくれぐれも留意すると共に、母校京都大学をいつまでも心の中に抱いて歩んで下さい。京都大学もまた、諸君一人一人の歩みを永く、いつまでも見守りつづけることでありましょう。

卒業生の淑女ならびに紳士諸君、諸君の栄えある門出に当り、心より祝意を表すると共に、一言私の所感を申し述べて饞けの言葉といたします。

(本稿は、3月24日の卒業式における総長のことばを速記をもとにしてまとめたものである。)

## ＜大学の動き＞

### 昭和56年度入学者選抜学力試験の結果

3月4日(水)と5日(木)の2日間にわたって行なわれた昭和56年度入学者選抜学力試験の合格者氏名が、3月18日(水)に学部ごとに発表された。

今年度の募集人員は、2,506名であったが、各学部における審査の結果、合格者数は2,512名になった。

学部別の受験者数および合格者数等は下表のとおりである。



学 部	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	倍 率	欠席率(%)	合格者数	合格者得点	
								最 高	最 低
文 学 部	200	747	※ 747	732	3.7	2.0	200 ( 67 )	916.83	804.5
教 育 学 部	50	217	※ 217	215	4.3	0.9	50 ( 12 )	949	834
法 学 部	330	844	839	815	2.5	2.9	334 ( 34 )	1,002.5	832.5
経 済 学 部	200	680	680	672	3.4	1.2	201 ( 7 )	1,022	842.5
理 学 部	281	847	843	816	2.9	3.2	281 ( 15 )	889	711
医 学 部	120	363	※ 363	346	2.9	4.7	121 ( 6 )	1,166	1,020.5
薬 学 部	80	160	※ 160	159	2.0	0.6	80 ( 41 )	1,040	885
工 学 部	945	1,800	※ 1,800	1,779	1.9	1.2	945 ( 9 )	1,128	760.05
農 学 部	300	583	※ 583	571	1.9	2.1	300 ( 37 )	1,110	781.5
計	2,506	6,241	6,232	6,105	2.4	2.0	2,512 (228)		

(注) (1) ※は第1段階選抜を行わない学部を示す。(2) 受験者数、欠席率は最終日(文・教育・法・経済学部は外国語、理・医・薬・工・農学部は理科)のものである。(3) 合格者数の( )内は女子で、内数である。

(4) 各学部の満点は、文学部1,100点、教育・法・経済学部1,150点、理学部1,050点、医・薬・工・農学部1,250点である。

### 昭和55年度修士学位授与式

3月23日(月)午前10時から、昭和55年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は名誉教授など来賓の臨席のもとに学位記授与が行なわれ、「総長のことば」があっ

て午前10時35分に終了した。

修士課程修了者は、文学研究科71名、教育学研究科18名、法学研究科11名、経済学研究科15名、理学研究科114名、薬学研究科28名、工学研究科538名、農学研究科101名の計896名である。



## 昭和55年度卒業式

3月24日(火)午前10時から、昭和55年度卒業式が、本学総合体育館において挙行された。

卒業式は、名誉教授など来賓の臨席のもとに行なわれ、学歌斉唱、合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時45分に終了した。

新学士は、文学部208名、教育学部40名、法学部381名、経済学部198名、理学部271名、医学部127名、薬学部73名、工学部851名、農学部279名の計2,428名である。

## 医療技術短期大学の卒業・修了式

医療技術短期大学部では、3月20日(金)午前10時から、本短期大学部大講義室において来賓・父兄等臨席のもとに、看護学科(第4回)および衛生技術学科(第3回)卒業式ならびに専攻科助産学特別専攻(第6回)修了式を挙行した。

式は卒業証書及び修了証書授与、「学長のことば」、「主事のことば」、来賓祝辞と進行し、午前10時30分に終了した。

## <紹介>

### 農学部・植物生殖質研究施設

農耕の歴史は約1万年といわれているが、この間に、人類は野生種から多数の栽培植物を創り出し、それらの多様な遺伝的特性をもつ系統が世界各地で保有されてきた。しかし地球上の開発が進むにつれ、自然の生物圏を日一日と荒廃に追いやり、また近代化した農業および技術が急速に広まるに伴い、多くの有用遺伝資源の多様性は消滅の危険にさらされている。その一方では、増大する人類の衣食住についての欲求を満たすために新しい生物資源の探索と開発が強く要望されている。本研究施設は、栽培植物の起原・分化・伝播の研究ならびに種子などの生殖質を通じて世代から世代に伝達される遺伝資源の探索・収集・保存・開発に関する研究を目的として、昭和46年に京都市の西南部にあたる向日市物集女町に新設され、栽培植物起原学部門が設置された。しかし、その歴史は古く、昭和34年に木原生物学研究所の旧建物

この日新しい門出を迎えた者は、看護学科44名、衛生技術学科33名および専攻科助産学特別専攻19名である。

(医療技術短期大学部)

## 部局長の交替

### 理学部長

加藤幹太理学部長の任期満了に伴い、その後任として山口昌哉理学部教授(計画数学講座担当)が4月1日任命された。任期は、昭和58年3月31日までである。

### 工学部長

西島安則工学部長の任期満了に伴い、その後任として佐藤 俊工学部教授(伝熱工学講座担当)が4月1日任命された。任期は、昭和58年3月31日までである。

### 教養部長

阪倉篤義教養部長の任期満了に伴い、その後任として繁澤和夫教養部教授(地学担当)が4月1日任命された。任期は、昭和57年3月31日までである。

および土地が所属移管され、農学部附設の農業植物試験所として発足し、上記の研究を促進してきた。

栽培植物起原学は個々の栽培植物の成立過程、その分化および伝播を研究する分野である。この部門は諸外国にさきがけて設置されたもので、国際的に強い関心が寄せられている。現在、専任教官3名、技官3名で運営されている。本研究施設の研究分野を専攻とする大学院学生は現在10名である。

現在、実施中の研究課題を列記すると、以下のようである。

1) 栽培植物の起源 — 数次にわたる中近東および中南米の現地調査による野生祖先種およびその近縁種の探索収集がおこなわれ、それらに基づくコムギ、トウガラシ、サツマイモ、ジャガイモの祖先種の発見、もしくはその起原の解明など多くの成果を収めてきた。このほかトウモロコシ、インゲンマメ、雑穀類、サトイモなどの起原に関する問題を取りあげている。

2)進化と系統分化に関する研究 — 15属を含むコムギ族の属間、種間雑種の細胞遺伝学的分析による系統発生学的研究。

3)有用遺伝資源の探索・開発・利用 — 目的とする遺伝資源はどのような環境条件下に存在するか、その地域はどこかなどの探索学の確立、さらに石油植物のような新資源植物の開発、また耐病性、耐塩性などの有用遺伝子を近縁野生種より栽培種に導入する場合の染色体工学的の方法の開発などの研究。

4)有用遺伝資源のコレクション事業 — これは本研究施設の最も特徴とするものの一つである。各国および本学関係を含む世界各地への学術調査隊による遺伝資源に関する莫大なコレクションを保存し、国内外の研究者の要求に応じて研究素材として配布している。とくにコムギおよびその近縁植物のエギロプス属の世界各地からの収集系統

は文部省の系統保存事業の一環として維持保存され、また国際コムギ研究連絡委員会および世界食糧農業機構 (FAO) の遺伝資源委員会によって重要なコレクションセンターとして認められている。現在ではそれらの収集系統は質、量ともに諸外国にみられない充実したもので、それらの系統の諸形質の特性データは FAO の遺伝資源情報に組み込まれ、世界の各国の研究者によって利用されている。現在保存されている系統の概数はコムギ 10,000, トウモロコシ 1,000, トウガラシ 900 およびその他各種で、2基の長期保存用種子貯蔵庫において維持されている。

本研究施設の将来計画としては、遺伝資源探索学および生殖質保存学の2部門の設置を推進し、既設の部門と協力することによって所期の目的を達成したいと願っている。

(農学部)

## ＜部局の動き＞

### 原子炉実験所第15回学術講演会

原子炉実験所では、3月19日(木)午前10時から午後4時40分まで事務棟会議室において、第15回学術講演会を開催した。

演題と発表者は次のとおりであった。

小角散乱用熱中性子チョッパの設

計……………小野正義(京大炉)

スーパーミラー中性子タービンの

製作と試運転……………宇津呂雄彦・石川良昭・奥村 清・海老沢 徹(京大炉), 川端祐司(京大工), 白濱茂樹(九州電力)

LINAC-コールド・ソースの中性

子強度と超冷中性子実験……………奥村 清・宇津呂雄彦・海老沢 徹(京大炉)

KUR 中性子導管を用いた生体中の

ppm オーダの<sup>10</sup>B 定量……………古林 徹・海老沢 徹・秋吉恒和・神田啓治(京大炉)

中濃縮ウランを使用した KUHR

の熱水力学特性……………三島嘉一郎・林 正俊・神田啓治・柴田俊一(京大炉), W. L. Woodruff, J. E. Matos, A. Travelli (アルゴンヌ国立研)

中性子線回折による超弾性変形の

観察……………床次正安・坂本英和・小藤吉郎・堀内弘之・清水謙一(阪大

産研), 大塚和弘・宮崎修一(筑波大物質工学系), 岩田 豊・渋谷 厳(京大炉)

放射性イオン注入法による化合物

半導体の保護膜の研究……………横田勝弘・古田博伺・柴田康雄・田村 進・片山佐一(関大工), 石原信二・西川佐太郎・木村逸郎(京大炉), 蒲生健二・難波 進(阪大基礎工)

各種不純物をドーブした MgO の

原子炉照射効果……………盛山武祥・奥田修一・佐藤佑二(大阪府放射線中央研), 岡田守民・中川益夫・跡部紘三(京大炉)

低温中性子照射によるカドミウム

ハライド結晶での色中心生成……………中川英之・松本弘明(福井大工), 中川益夫(京大炉)

ZnS の格子欠陥……………松浦興一・

岸田 悟・鶴見一郎(鳥大工)

β-ジケトン錯体による核分裂生

成物の昇華分離……………西川佐太郎(京大炉), 代田悦章(東京化成工業)

核酸構成成分の反跳トリチウム化

の研究……………草間慶一(静大理), 藤沢弘介(埼大教育), 市原慶和(京大霊), 石田靖彦・山下信彦(静大理)

熱中性子照射による突然変異の誘

発とその作物育種への利用……………鶴飼保雄・山口勲夫(農業技術研放射線育種場), 山下 淳(農業技術研生理一科)

(原子炉実験所)





## 保健コーナー

## 美しい歯並びのために

むし歯および歯周疾患(歯肉炎、歯槽膿漏など)は人種、性別、年齢に関係なく人類に最も広く蔓延している疾患の一つです。歯を喪失する原因として、20歳頃ではむし歯により、40歳以後では歯周疾患によるものがほとんどであると言われてい

ます。歯が抜けていたり、ボロボロになったむし歯や黒ずんだ歯肉が口元に見え隠れすることは、その人のイメージをだいなしにするほど気になるものです。健全な歯並びは健康美のシンボルとも言え

## むし歯(う蝕)

むし歯は歯の表面を覆うエナメル質の脱灰から始まり、病変は象牙質におよび、更に歯髄へと組織の破壊が進みます。病変が歯髄に近づくと、熱いものや冷たいもの、あるいは甘いものが歯にしみるようになります。

口腔内には沢山の微生物が常在していて、その中の酸産生菌が食物中の糖質を分解して酸を生じます。即ち、歯の表面に糖質の食べかすが附着停滞していると、これら細菌によって乳酸や酢酸などの有機酸が生じ、このためエナメル質が脱灰され、歯の破壊が始まります。

従って、むし歯の成立には口腔内の常在細菌、ことに酸産生菌と、食物中の糖分とが必須の要因であって、そのほかにも唾液の性状や歯の表面の性質も関係しています。

そこで、むし歯を予防するには口腔内細菌を除去するか、あるいは糖質を食べないこととなります。しかし、糖質を全く含まないような日常の食生活は實際上考えられないので、糖質、特に砂糖分をできるだけ習慣的に制限することが予防の決め手の一つと言えます。そして一方では、口腔内細菌を完全に除くことはできないにしても、正確な歯磨きによって口腔内を常に清潔に保つことができれば、酸産生菌を少なくすると同時に、糖質から産生される酸の作用時間を短縮することができます。正しい歯磨きがむし歯予防の要になる所以です。食事のたびごとによく口を漱ぎ、歯を磨

くこと、特に就寝前の歯磨きが大切です。昼間は舌や唇の動き、また唾液の流れによってある程度の自浄作用がありますが、眠っているあいだはこの作用がないからです。

むし歯は自然治癒のあり得ない疾患であると同時に、早期発見が容易であるため、痛みの起こらない早期に治療することが大切なことです。

## 歯周疾患

歯肉炎と歯槽膿漏とがその代表的なものです。歯周炎は3歳頃から発生しはじめ、11~14歳でピークとなり、その後一時的に下降傾向をとりますが再び上昇して、25歳前後には85%が罹患し、60歳代では95%にも達すると言われています。

歯槽膿漏は年長者に多いことは確かですが、19~25歳の発生率が10~30%(本学々生についての以前の調査では9~13%の罹患率)、49~65歳では実に97~100%の高率であると言われています。

本症の原因には、歯石や不良補綴物などによる歯肉への機械的刺激、細菌感染、咬み合わせ不良などの局所性原因と、糖尿病、貧血、妊娠などの全身性原因があります。その中で特に多いのは歯石の沈着によるものです。口腔清掃の不良は歯石の沈着を招きやすく、歯肉への刺激になると同時に細菌の恰好の繁殖場所ともなって歯肉炎を起こしてきます。この状態を放置すると歯槽骨の吸収が促進されて歯が動揺し、細菌感染が拡がって膿や血が出たり、終には救いようのない歯槽膿漏に進展します。

歯石は唾液中の無機塩類が歯の周囲に沈着したもので、その母体となるのは食べかすに由来した歯垢と呼ばれるものです。歯垢は柔らかいので、上手に歯ブラシを使えば除くことができますが、歯石は硬く附着しているので歯磨きで取除くことはできません。

従って、実際の歯槽膿漏の予防はむし歯のそれと同じく、やはり正確な毎日の歯磨きによって歯石の母体となる歯垢をていねいに除去し、歯石の沈着を防ぐことになります。そして歯石ができれば歯科医に除去してもらうことです。

正しい歯磨き方法や歯石の有無および除去については、歯科医にご相談下さい。

(保健診療所 清水泰知)